

『君が名はあれどわが名し惜しも』 卑見

—その文学思潮史的考察—

鈴木日出男

一 はじめに

内大臣藤原卿、甥鏡王女ニ時、鏡王女贈内大臣歌一首
玉連 覆乎安美 開而行者 君名者雖有 吾名之惜裳

いうまでもなく万葉集卷二・九三番の歌であるが、代匠記精撰本の中で契沖は第四・五句の「君」と「吾」とは元来入れ替るべきではないかと説いている。が、現在ではこの見解の積極的な支持はま
ずないようである。契沖の結論については首肯しがたいが、しかし
契沖はなぜそういう懷疑を抱いたのか、いまなおその懷疑が存する
かなどの点はやはり再検討ささるべきであろうし、その意味でこの
説は非常に示唆に富んでいると思われる。いま、私はここに出発点
をおいて、いわゆる文学思潮史的な側面からその周辺の考察を試み
ようと思う。

二 その解釈の周辺をめぐって

第四・五句の「君が名はあれどわが名し惜しも」であるが、その
語法的客観性に支えられた解釈という点においては、いまなお種々
の説が行われ一定しない。佐伯梅友博士の「陳述説」と大浜巖比古

氏の「存在説」との対照的ご意見は第一にあげなければならぬであ
らうし、古典文学大系注・澤瀉久孝博士注釈等数説のあることは、
ひとつにはこの歌のもつ意味上のことにも起因しているのではない
だろうか。すなわち、この「君が名はあれどわが名し惜しも」は、
何としても利己的な個人主義の感を免れないのであつて、その意味
で読者の意表のつくものをもつていたのではないか、そこに解釈上
にも種々の考慮がなされる、と考えたのである。

ここで代匠記の見解を引用してみたい。まず初稿本では一首の解
釈を互いの愛の緊密さと男女の差異とに求めようとし、さらに、こ
の歌のこころは古今集の「玉くしげあけば君が名立ちぬべし夜ふか
くこしを人みけんかも」・拾遺集の「岩橋の夜のちぎりもたえぬべ
しあくるわひしきかつらぎの神」にひとしいとしている（「契沖全
集」一）三八五―六頁。ところが、精撰本では初稿本をそのまま受け
継ぎながらも更に次のような見解を加えている。

今按、六帖ニ此下句、我名ハ有トモ、君カ名惜モトアリ。名ヲ
惜ムト、玉クシケト、両所ニ出セルニ、共ニ上ノ如シ。此集第四
ニ、坂上大嬢カ家持ニ贈ル歌ハ、吾名ハモ千名ノ五百名ニ立ヌト
モ、君カ名タタハ惜ミコソナケ。如此、人ヲ先ニシテ吾ヲ後ニス
ルハ道ナレハ、古本ハ、上ハ吾、下ハ君ナリケルヲ、今ノ本誤テ

引替タルカ。然リトモ、ワカナハアレト、キミカナシヨシモト読ムヘシ。アリトモノ点ハ心得カタシ。又按スルニ、内大臣ノ余ニ別ヲ惜テ飯カテニスルヲ、吾モ別ハ悲ケレト後ノタメ強テ返ス心ナレハ、誠ニハ我ヲ先ニスル心ナラネト、君カ名ヨリモ我名ノ惜ケレハ深ク思フト云コトノ誠ナラハ我爲ニモトク返ネトハケマシテ催ヤルニヤ。古今二人ハイサ我ハナキ名ノ惜ケレハトヨメルモ人ヲ後ニスルニハアラス。(同三八六頁)

初稿本から精撰本へと相当の苦心が払われて、ついには本文自体への懐疑にまで至っている。しかし、ここにおける契沖の考察が本文の懐疑にまで至らなければならなかつたのは、ひとつに文学の通時的視角の稀薄さによるのではないかと考えるのである。

「君の名はともかくとして私の名の方が惜しい」という鏡王女の歌は、かなりの高姿勢からであつて、利己的な個人主義の感じが強く、佐伯博士のように解釈すればその感は一層著しい。そして、これと契沖が指摘した二首（坂上大嬢の歌・古今六帖の歌）とを比較するとき、坂上大嬢の歌の方が、愛に生きる女性のより女らしい願ひであるとする事ができよう。しかし、それだからといつて、古今六帖として後世に現われたように、あるいは契沖らのように、「君」と「吾」とが入れ替るべきもの、ないしはそうした方が歌としてすぐれているというような意見にはならないと思うのである。鏡王女の歌は歌として、坂上大嬢の歌はそれとして、また古今六帖として現われたのはそれとして、互いに相違し対照性をもつことは、それに相応の必然性があると考えるのである。

その「存在」を必然たらしめるひとつは個人的環境の相違である。坂上大嬢は後に家持と結婚する女性であり、一方の鏡王女は、中島光風氏らが説かれるように天智天武の両天皇と異母兄妹としな

つたことは否定しがたいであろう。また、次に人間のより肉面的なものとしての性格的な、個性的な相違があるろうと思われる。更にまた、歴史的な場の相違をも考えなくてはいけないと思う。

古代全体を通じて、天皇を中心としてその周辺にあつた貴族たちは、政治上経済上文学上などのヘゲモニーを復讐的に握つていたのであるが、万葉初期のそれ、末期のそれ、王朝女流文学隆盛期のそれとは、かなりの差が生じている。一方、古代を通じて恋愛形態ははなはば放縱であつたが、それをかなり自制させたのは世間への体裁、すなわち具合の悪い噂の立つこと、それによつて起る利害関係の種々相ということであつた。後の平安朝では極度の利己的個人主義などといわれるが、多少のこういう特色ならば古代全体にいえると思う。鏡王女と坂上大嬢との歌の対照的な相違は、かなりの利己的な表現とやさしい女心のそれとにあることは前述のとおりであるが、その観点をかえれば前者は自己を中心として外部に向けられる姿勢であるのに対して、後者は自己から発してまた自己の中に戻つてくるという、外面的との二つの対照性にもなると思つてよいと思う。鏡王女の二人称に対する外面的な発想は、複雑な事象がからまつていない古代の自由人が想像されて、それゆえに直線的な卒直な態度で明かるく正気に満ちているとも思われる。利己的だとか歪曲した個人主義的だとかいわれるけれども、そこには王朝の末期に多くみられる、あのやりきれない暗さは感じられないし、愛の自由な謳歌とみることもできよう。後者の場合、所詮は男に頼らなければどうすることもできないという、ある意味で宿命的な不自由な、いくらかの暗さがその裏面にうかがえるのではなからうか。そこに肉面的な一脈の愛ゆえの苦悶がひそみ、自己の内省的な態度が加わつたもの、としてはずれていないと思う。その自己から他、再び自己への参照という内省的な態度においては、王朝女流の自照文学にその

発想的態度の類似性をみいだすことができよう。また、この歌は、ある程度の利己心をもうひとつの別な利己心によつておさえ、そのすきまから発した嘆息だと、みてみられないこともないであろう。

三 発想法の分析をめぐつて

ここで、この九三番の歌から一端離れて、その歌が存在する巻二のうちの相聞歌全体の発想法ということに注目してみたい。九三番の歌のほぼ同時期として一般特質を知るために、万葉集巻二相聞歌全部（八五―一四〇）、坂上大嬢と関連して万葉集巻四相聞歌の一部（大嬢の歌の四首前から巻末まで七二七―七九二）及び古今六帖と関連して古今和歌集恋三全部（六一―一六七）の三群（巻四の抽出と古今集恋三の選択は歌数をほぼそろえたいところからで特別の理由はない。古今六帖の代りに古今集を採つたのはほぼ同時期に特質をみる場合に前者が汎時代的な拾遺が濃厚な特殊意識のもとなされた感もあるので、いまはむしろ後者の方が適当だろうと考えたからである。）を比較して次の三つの分析を試み次頁に表示した。

第一に発想法の表面的な形態として三つ、まずAとして、次のように二群多様に分析してみた。

〔イ〕○叙―平叙叙述というよりむしろ下記に該当しないもの

○疑―疑問 ○反語 ○反仮―反実仮想 ○想―想像予想 ○願―願望希望 ○命―命令 ○志―意志決意

〔ロ〕○肯―肯定表現 ○否―否定表現

次には、Bとして、その歌が自己（Ⅰ）それとも相手・第二人称（Ⅱ）あるいはそれ以外の第三人称（Ⅲ）の中の主にいずれについて行われたかについて調べた。（Ⅲにおいて必ずしも人物とに限らなく、むしろ自然物神などが多い。また、Ⅰ・Ⅱでも直接に人物そのものではないが毛髪などのような身体的部分から人物全体にかか

わりあいを示すものは含めた。）

最後にCとして、その歌の内容が主として行動的（行）であるか状態的（状）であるか、それとも思考的（思）であるかについてそれぞれ分類した。

第二に、相手の愛（一部には恋歌でないものも不明なものもあるが、親子兄弟などの場合も含めて考えた）に対処して（1）歌の表面に現われたその態度はどうであるかについて、次のように分類した。

○肯―肯定する態度、相手への思いやり、求愛、愛の願望などを含む ○曲―とにかく表面的には否定的であること。ヤリカエシ・愚も大きくいつて該当しそうだがこれは別に設けた。○ヤリカエシ―肯定的態度を明らかに裏面でほめかすものとして、曲とは別にした。○愚―愚弄的な態度 ○苦―愛ゆえの苦惱不安など ○得―愛・恋の得意な肯定讚美

また、(2)その内容的なものにおいて結局はどうであるのかについて○肯定○否定の二つから行った。

次に第三に、噂などの世間に対する考慮が歌の表面にうち出されているかについてその有無を調べた（個々の歌については稿末に一覧表として掲げる）。

さてその整理された結果をもとに考えてゆくと、（AⅠ）において全体的に「叙」・「疑」・「想」に定着する傾向がうかがえるようであるが、ひとつには類型化としてよいだろうし、巻二でかなり形態が散在しているのはそれだけに自由な発想といえないだろうか。「想」が次第に増すのは時代とともに自己の内面的世界が拡大する――させられる――ことを意味すると思われる。また、巻二のみみられる「反仮」は古い年りの反現実的な、いわば古代ロマンティズム的なものを示しているようで、事実これらの歌は苦悶である時不思議と暗さはなく直線的に歌いあげている。いわば積極的な

○第二の中の内容的なものに関するのはほとんどが肯であるので省略した。
 ○表中IIの？は分析が非常に困難なもの、×は愛として該当しないとみられるもの。

分類		歌群	万葉集卷二相聞		万葉集卷四相聞		古今集恋三	
			実数	%	実数	%	実数	%
I	A イ	叙	23	43.3	31	46.9	31	50.8
		疑	10	18.8	14	21.2	7	11.4
		反語	1	1.8	5	7.5	2	3.2
		反仮	4	7.5	0	0	0	0
		想	5	9.5	6	9.0	10	16.0
		願	2	3.5	3	4.5	2	3.2
		命	4	7.5	2	3.0	3	4.9
		志	4	7.5	5	7.5	6	9.8
	A ロ	肯	48	90.5	52	78.7	51	83.6
		否	5	9.5	14	21.2	10	16.3
	B	I	28	52.8	44	66.7	34	56.4
		II	12	22.6	14	21.2	4	6.5
		III	13	24.5	8	12.1	23	37.8
	C	行	24	45.2	21	31.8	19	31.1
		状	17	32.0	29	43.9	34	55.7
思		12	22.6	16	24.2	8	13.1	
II (表面的)	肯	24	45.2	21	31.8	10	16.3	
	曲	5	9.4	6	9.0	1	1.6	
	苦	11	20.7	28	42.4	47	77.0	
	ヤリカシ エ	4	7.5	1	1.5	1	1.6	
	愚弄	2	3.7	0	0	0	0	
	?	5	9.4	3	4.5	2	3.2	
	得意	2	3.7	0	0	0	0	
	×	0	0	7	10.6	0	0	
III	○	3	5.6	8	12.1	22	36.0	
	×	50	94.4	58	87.9	39	64.0	

空想ということになりはしまいか。また、(Aロ)では「否」が次第にふえていて、この数値だけではよく判断しがたいが、歌の内容に自制的な面が多いようで、そこに内容的・反省的な態度がうかがえよう。

(B)のIIが次第に減つてIⅢ(特にⅢ)が増すのは、発想が直接から間接へ、また外面から内面へと移行したと思われる。それだけに巻二は直接的であり外面的であるともいえようし、その度数のかなり散在することをみても自由な態度がうかがえる。Iに該当する歌数が巻二と古今とが同様に考えられるが、その内容については相当の差異があつて、後者の多くには二人称に対する強い意識がからんでいる。

(C)において「行」が減少し「状」が圧倒的にふえるのは、ここでも直接から間接へ、積極的から消極的へとすることができらるうし、巻四で「思」が増すのはひとつにその変化の過渡期を表わすとしてよいかもしれない。

第二の表面的分析において、「肯」・「曲」が徐々に減つて「苦」が圧倒的に増え次第に「肯」・「苦」にしばられていくのは、ひとつに自由な態度が薄らぎ、発想の類型化ということがこでもいえる。愛に対する苦悩不安が増すのは更に重視すべきである。それは裏面的に殆んど「肯」であること、「状」が増すことを考慮すれば、一層その特色が判然としてくる。

第三の分析に該当する歌は、万葉巻二(3)・万葉巻四(8)・古今集恋三(22)とその数が非常に勢力が増加することがわかる。このことを前述の「苦」とともに考えるとき、双方の関連性と必然性が明白になり、時代とともに暗い不健康な姿が人間の利己心と結びついて更に悪循環を深めていつたことが推定できると思われる。それだからこそ、巻二の時期はそういう特質がまだ稀薄であることが肯定されると思う。

四 文学思潮史の変遷をめぐつて

このような分析から推定できる特質は、勿論個々だけのものではなく互いに関連して、ひとつの有機的な作用をしていることはいまでもない。しかし、ここでさらに、この小稿で直接にかかわりあいをもっている分析第三の問題、世間に対する考慮について、もう少し深入りしたいと思う。単に該当する歌数だけが増しているのではなく、その質的内容的なものにもかかなりの相違がみられる。

巻二の三例の中、一例は冒頭の鏡王女の歌であるが、他の二首はともに次にあげる但馬皇女の歌である。

(14)秋の田の穂向きの寄れること寄りに君に寄りなな事痛かりとも
(16)人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る

前者では荒波に抗して自己の決意が積極的な態度としてうかがえるし、相手に対する願望がその裏面にあるとしても、あまりそれにとられていないようである。後者は、但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、竊かに穂積皇子に接ひてすでに形はれて作りましし歌一首」と題詞にあることから、かなり切羽つまつた状態にあることがわかる。「未だ渡らぬ朝川」は文字どおり受け取ると、その状態から生じた自己の積極的な行動、いわば切迫した自己の状態を他の行動に置換して苦痛を軽減しようとする積極的行動的なものであるとともに、相手にとらわれすぎない自由があることも確だと思われ。それだから苦惱的であるとしても、自己の心理的内面に鋭くいこむような、そのためにいたずらに空転するような、じめじめした状態が強烈でない。なお、この句の解釈が「みそぎをする」とか「男女の仲の成る」をいうとかの諸説があつて一定しないのは、九三番と同質な、歌の内容と読者との間に介在する問題がそこに横たわっているのかもしれない。また、この歌の対象は形式的に一応自

己ということであるが、更に考えてみるならば空間に発した姿勢とみることもできると思う。類型的ないい方ではあるが、それは平安朝の恋歌の多くにみられるように、自己の感情が自然物などの第三人称物に向けられるものと類似するようであるが、平安朝のそれは反照として再び自己の中に戻ってくる場合が多い。すなわち、第三者をひとつの媒介物として発せられたと考えるべきで、自己から他、更に自己への態度がみられると思う。分析の結果、次第にⅠとⅢに定着する傾向があることから間接的ないしは内面的な発想への移行が強まるといったのは、このことと関係がある。但馬皇女の歌はそういう意味での間接的なものでなく、むしろ空間への直接的謳歌ではないかと考えるのであつて、その仕方では九三番と同質だとしてもよいと考えるのである。

次に巻四について考えてみたい。坂上大嬢の「逢はむ夜は何時もあらむを何すとかその夕あひて言の繁きも」(七三〇)は自分の苦悩を相手のせいだとなすりつけて、とらわれすぎた不自由さがあるようだし、同じく「かにかくに人は言ふとも若狭道の後瀬の山の後も逢はむ君」(七三七)では未来に歡喜を託してじつと待つているという静かな内省的態度がうかがえるのではないだろうか。家持の歌「今しはし名の惜しけくもわれは無し妹によりては千たび立つとも」(七三三)「恋死なむそも同じぞ何せむに人目他言言痛みわがせむ」(七四八)には世間に対する、ある種の抵抗が感じられるが、「かくばかり面影のみに思はえはいかにかもせん人目繁くて」(七五二)「人目多み逢はなくのみぞ情さへ妹を忘れてわが思はなくに」(七七〇)のかなり無気力な消極的態度と同様、世間の暗い影を否定しきれない不安があるし、それがより内面への省察から入っているようである。

古今集ではそういう特質が一層顕著である。「みちのくにありと

いふなるなとり川なきなとりてはくるしかりけり」(六二八)「人はいき我はなきなのをしければ昔もいまもしらずとをいはむ」(六三〇)などは真実かどうか疑わしいが「なき名」として苦しむ。しかし、そこにはむしろ弁解的なものが潜んでいるようである。「君が名もわが名もたてじなにはなるみつともいふなあひきともいはじ」(六四九)「名とりがはせぜのむもれぎあらはればいかにせんとかあひみそめけん」(六五〇)などと二人だけの秘め事としてそれゆえにその不安に悶える。また噂のたつことを気にすればするほど自分ではどうすることもできなくなり、いたずらに焦燥するし「たきつせのはやき心をなしかも人めつづみのせきとどむらむ」(六六〇)、敢えて積極的に出ようとすると却つて中途半端な恋のために絶望の涙にむせぶことも少なくない。「あふ事はたまのをばかりなのたつはよしののかはのたきつせのごと」(六七三)「むらどりのたちにし我名今更に事なしぶともしるしあらめや」(六七四)これら是一部にすぎないが、とにかく、愛ゆえの苦悶を自己の内面ではかなく詠嘆する傾向がみられる。古今集でもうひとつ注目したいのは、この分析第三に該当する歌が多く読人不知だということである。のみならず次に示すように恋歌は圧倒的にそれが多い。

古今集の読人不知の歌の数

○恋歌(恋一—恋五・三六〇首) 一八一首 (五〇・二%)

○四季歌(春上—冬・全三四三首) 一一九首(三四・七%)

そのことから、いわばこの覆面の歌人について、その一部は歌の内容が適当でないと感じられるところから正面からの態度を嫌つた作家であるとして全くはずれていないと思う。あの三人称に託する恋歌の形式も、実は第三者の介入の可能性のある贈答という実際的な要素にも関与しているのだろう。ともかく、作者名まで隠さなければならぬところまでも、いわゆる平安朝的な特質が濃厚さを加え

ていつたと思われる。

以上これまで、万葉巻四の一部と古今恋三とを比較することによつて、卷二相聞歌の発想法などについて分析し考えてきた。その結果として、やはり時代とともに歌の発想にはそれ相応の変遷があることも見逃したくないのである。したがって、鏡女王の歌、坂上大嬢のそれ、古今集のそれなどをあくまでひとつの次元において把握することには、おのずから矛盾が生ずるのではないかと考えるのである。

五 五 五 五 五 五

これまで述べてきたような、歴史的背景やそれに伴う一種の文学思潮史的特質という側面から万葉九三番の歌の文学的発想と存在の可能性を積極的に肯定することができると思ふのである。同時に、坂上大嬢の場合もそれなりに肯定されよう。古今六帖として現われた歌についても伝誦の過程を考えたとしたら、その伝播において、変えられてしまう必然的な背景をもつていと考えるのである。鏡女王の歌を考えると、単に形象的な作品面を考えるのではなく、鏡女王という作家そのものに対しても同時に焦点をあわせるべきであるかと考ふる。時の天皇と肉身だとする一説にしたがわないまでも、密接な関係のあることはやはり否定されない。そういうふうな権力を複数的に握つていた実力者の庇護を、あるいは真近な背景として、そういう環境にありえた多くの作家たちが活躍したのが万葉初期である、と考へたいのである。但馬皇女にしてもその一人である。要するに、歴史の展開とともに、ただ漫然と発想の仕方や内容などが変わったのではなく、変えていかなければならない作家たちがその実権をにぎつて新たに登場したという、相互関連しあう二面的な展開を指摘すべきであると考へたいのである。だから、この歌を個人的な環境などから必然性を説くにしても、やはり史的な展開を

無視することができたいと思ふのである。
積極的に肯定しようとしたその可能性の幅広い範囲の中で、鏡女王といわれる女性が「玉くしげ覆ふをやすみあけてゆかば君が名はあれどわが名し惜しも」と歌つた固有な発想は、坂上大嬢の場合もそうであるが、個人的な環境条件にも左右され個性に媒介された、ただひとつの叫び声である。いま、鏡女王の九三番、坂上大嬢の七三一番、さらに古今六帖として語句を入れ替えられて現われた歌をならべるとき、そこには一般的な史的展開をも含めて文学思潮史としての明らかな展開があると考へるのである。

〔附表〕

万葉集 卷二 相聞歌

番号	95	94	93	(92)	(91)	90	89	88	87	86	85	
作者	藤原	藤原	鏡王	鏡王	天智天皇	衣通王						磐姫皇后
対象人物	安見	鏡王	藤原	天智天皇	鏡王	軽太子						仁徳天皇
Aイ	叙	叙	叙	叙	反假	志	志	疑	志	反假	疑	
Aロ	肯	否	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	
B	I	I	I	I	II	I	I	I	I	I	I	
C	状	状	思	思	状	行	行	思	行	行	行	
表	得	苦	曲	曲	肯	肯	肯	肯	苦	肯	苦	苦
内	肯	肯	?	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	
噂	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	

121	120	119	118	117	116	115	114	(113)	(112)	(111)	110	109	108	107	106	105	(104)	(103)	102	101	100	99	98	97	96	
〃	〃	弓	舍	舍	〃	〃	但	〃	額	弓	日	大	石	大	〃	大	藤	天	巨	大	〃	久	〃	石	久	
		削	人	人			馬		田	削	並	津	川	津		伯	原	武	勢	伴		米	〃	川	米	
		皇	娘	皇			皇		王	皇	皇	皇	郎	郎		皇	夫	天	郎	宿		米	〃	郎	米	
		子	子	子			女		子	子	子	女	女	子		女	人	皇	女	禰		禰	〃	女	禰	
〃	〃	紀	舍	舍	〃	〃	穗	不	弓	額	石	石	大	石	〃	大	天	藤	大	巨	〃	石	〃	石	久	
		皇	人	人			積	削	田	川	川	津	川	川		津	武	原	伴	勢		川	〃	川	米	
		女	皇	娘			皇	皇	子	女	女	皇	郎	郎		皇	天	夫	宿	郎		郎	〃	郎	米	
		子	子	子			子	明	子	郎	郎	子	子	子		子	皇	人	禰	女		女	〃	女	禰	
願	反	願	叙	叙	叙	命	志	叙	想	疑	反	叙	反	叙	疑	叙	想	叙	疑	叙	叙	叙	叙	叙	叙	
肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否	否
Ⅲ	Ⅲ	I	I	I	I	Ⅱ	I	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	I	I	I	I	Ⅱ	I	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	
行	状	状	状	状	行	行	思	状	行	行	思	行	状	状	行	状	状	状	思	状	思	行	行	行	行	
?	曲	肯	肯	苦	苦	肯	肯	肯	?	?	肯	肯	肯	苦	肯	苦	得	得	?	肯	?	曲	?	曲	曲	
肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	?	?	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	
×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	

728	727	番号		140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	(130)	129	128	127	126	125	124	123	122
〃	家	作	万	人	〃	長	〃	〃	長	〃	〃	人	長	長	石	石	大	石	三	園	三	〃
	持	者	葉	鷹		歌			歌			鷹	皇	皇	川	川	伴	川	方	臣	方	〃
	坂	对象人物	集	の								歌	子	子	女	女	田	女	沙	生	沙	〃
	大		卷	妻								妻	弟	弟	郎	郎	主	田	弥	羽	弥	〃
	嬢		四	鷹								妻	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	疑	A	相	鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	叙	A	聞	鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	否	口	歌	鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	Ⅲ	B		鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	状	C		鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	肯	表		鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	肯	内		鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	×	噂		鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃
	×			鷹								鷹	皇	皇	大	大	石	大	園	三	園	〃

754	753	752	751	750	749	748	747	746	745	744	743	742	741	740	739	738	737	736	735	734	733	732	731	730	729	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	家	坂	家	坂	〃	〃	家	〃	〃	坂	〃	
															持	上	上	上							上	
																大	大	大							大	
																嬢	嬢	嬢							嬢	
																持	持	持							持	
																坂	家	坂	家	〃	〃	坂	〃	〃	家	
																上	上	上							上	
																大	大	大							大	
																嬢	嬢	嬢							嬢	
																持	持	持							持	
叙	叙	疑	叙	疑	疑	反	反	叙	疑	志	叙	叙	叙	想	叙	叙	志	叙	想	願	疑	叙	叙	疑	叙	
肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否	肯	肯	肯	肯	肯	否	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否	肯	肯	否	
I	I	I	I	I	I	I	I	Ⅲ	I	I	I	I	I	Ⅱ	I	Ⅲ	I	I	I	I	Ⅲ	I	I	I	Ⅱ	
状	状	状	思	行	行	思	行	状	思	行	状	状	状	行	状	状	行	行	状	状	思	思	状	思	状	
苦	苦	苦	苦	苦	苦	肯	肯	肯	?	肯	苦	肯	苦	曲	苦	苦	肯	苦	苦	苦	苦	肯	苦	苦	曲	
肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	
×	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○	○	×

780	779	773	777	776	775	774	773	772	771	770	769	768	767	766	765	764	763	762	(761)	(760)	(759)	(758)	(757)	(756)	755	
〃	〃	〃	家	紀	家	〃	〃	〃	〃	家	家	〃	家	藤	〃	家	〃	紀	〃	坂	〃	〃	〃	〃	嬢	大
				女										原						上					伴	田
				持	持					持	持	持	女	郎		持		郎		郎	女				村	大
〃	〃	〃	紀	家	紀	〃	〃	〃	〃	坂	紀	〃	坂	不	坂	紀	〃	家	〃	坂	〃	〃	〃	〃	坂	〃
			女	女						上	女		上	上	女					上					上	〃
			郎	持	郎					嬢	郎		嬢	明	嬢	郎	持			嬢					嬢	〃
想	志	願	想	疑	疑	志	叙	想	反	叙	叙	願	叙	想	疑	志	反	疑	叙	叙	疑	疑	叙	叙	命	叙
否	肯	肯	肯	肯	肯	否	肯	否	肯	否	肯	肯	否	肯	肯	肯	否	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否	肯	肯
Ⅱ	I	I	Ⅱ	Ⅱ	I	I	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	I	I	I	I	Ⅱ	Ⅱ	I	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	I	Ⅱ	I	I	Ⅱ	I	
行	行	行	行	行	行	状	思	状	思	思	行	状	行	状	状	状	思	行	状	状	思	行	行	行	行	状
曲	?	肯	曲	カヤ シ	苦	曲	苦	苦	曲	肯	苦	肯	苦	肯	肯	肯	肯	?	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯
肯	肯	肯	肯	?	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否	否	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

624	623	622	621	620	619	618	617	616	番号
源	小	業	読	読	業	と	業		作
宗			人	人		し			者
千			不	不		ゆ			
朝			知	知	平	き	平		
臣	町	平							対
									象
									人
									物
反	疑	叙	想	叙	叙	想	叙	叙	A
語									I
	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否	A
									口
	I	III	I	I	I	I	II	I	B
思	行	状	状	行	状	思	状	状	C
肯	曲	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	表
肯	否	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	内
×	×	×	×	×	×	×	×	×	噂

古今集恋三

792	(791)	(790)	(789)	(788)	(787)	(786)	785	784	783	(782)	781
"	藤	"	"	"	"	家	"	"	家	紀	"
	原									女	
	久										
	須						持		持	郎	
	磨										
"	家	"	"	"	"	藤	"	"	娘	友	"
						原					
						久					
						須					
						磨				子	
	持										
叙	反	叙	叙	叙	叙	叙	叙	叙	叙	疑	叙
	語										命
肯	否	肯	肯	肯	肯	肯	否	肯	肯	肯	肯
III	I	I	I	I	I	III	I	I	I	I	II
状	思	思	思	思	思	状	状	状	行	行	行
×	×	×	×	×	×	×	×	苦	苦	苦	肯
											肯
×	×	×	×	×	×	×	×	肯	肯	肯	肯
×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×

649	648	647	646	645	644	643	642	641	640	639	638	637	636	635	634	633	632	631	630	629	628	627	626	625	
"	"	読	業	読	業	大	"	読	寵	と	藤	読	み	小	読	つ	業	読	も	み	た	読	在	み	み
		人		人		江		人	と	し	原	人	つ	野	人	ら	人	と	は	は	だ	人	原	み	み
		不		不		千		不	し	ゆ	く	不	ね	小	不	ゆ	不	か	の	の	み	不	元	ね	の
		知		平		里		知	き	き	につ	知	ね	町	知	き	平	た	す	け	ね	知	方	た	だ

志	叙	叙	叙	疑	叙	叙	想	疑	叙	叙	想	叙	叙	叙	願	叙	願	想	志	叙	叙	想	叙	叙
否	肯	否	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否
I	I	III	I	I	I	I	II	III	I	III	I	III	III	III	III	III	III	I	III	III	III	I	I	
行	状	思	思	状	状	状	状	状	行	状	状	状	状	状	行	状	行	状	行	状	状	状	行	思
苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	?	苦	肯	苦	?	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦
肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	?	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯
○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×

675	674	673	672	671	670	669	668	667	666	665	664	663	662	661	660	659	658	657	656	655	654	653	652	651	650
〃	〃	〃	〃	読	平	読	〃	と	平	ふ	読	〃	み	き	〃	読	〃	〃	小	読	か	を	〃	〃	〃
				人	貞	人		も	か	か	人		つ	の		人			野	人	か	の			
				不	文	不		の	や	よ	不		ね	と		不			小	不	ぜ	の			
				知	文	知		り	ぶ	は	知			もの		知			町	知	は	は			
														り											

叙	疑	叙	叙	叙	叙	志	想	志	志	命	疑	想	命	想	反語	叙	叙	叙	叙	想	疑	叙	命	志	叙
肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	否	肯	肯	肯	否	否	肯	否	否	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯
Ⅲ	I	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	I	I	Ⅲ	I	I	Ⅱ	Ⅲ	I	Ⅱ	I	Ⅲ	I	I	Ⅲ	I	I	I	I	I	I	I
状	状	状	状	状	状	行	状	行	行	行	状	思	行	状	行	行	思	状	状	状	行	行	思	行	行
苦	苦	苦	苦	苦	苦	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦	苦
肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯	肯
○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	○	×	○

676
伊
勢
疑
肯
Ⅲ
状
苦
肯
○

○番号に()を冠してあるのは恋歌でないもの、または不分明な歌である。

付記

古今六帖書陵部藏二本(桂宮本・宮内庁本)は、「玉くしげ」の条の場合、

王くしげおほふをやすみあけたらばなにはありともわがのをし

とあり、「名を惜しむ」の歌とは本文が異なる。この二本によれば、この重出関係の歌は異なったルートを経たと思われ、その点伝誦性が濃厚と思われる。